

大栗聖由 学位論文審査要旨

主査 吉岡伸一
副主査 神崎晋
同 前垣義弘

主論文

Distinguishing acute encephalopathy with biphasic seizures and late reduced diffusion from prolonged febrile seizures by acute phase EEG spectrum analysis

(二相性けいれんと遅発性拡散能低下を呈する急性脳症と遷延性熱性けいれんとの急性期脳波スペクトル解析による鑑別)

(著者：大栗聖由、斎藤義朗、福田千佐子、岸和子、横山淳史、李守永、鳥巢浩幸、豊島光雄、瀬島斉、梶俊策、浜野晋一郎、岡西徹、富田豊、前垣義弘)

平成28年 Yonago Acta medica 掲載予定

参考論文

1. 健常者における正中神経を用いた超音波画像と神経伝導検査の比較検討

(著者：大栗聖由、佐藤明美、今井智登世、原文子、本倉徹)

平成27年 医学検査 64巻 85頁～90頁

2. 広汎なspike様波形が鼻咽頭誘導により軟口蓋振戦由来と同定できた一例

(著者：大栗聖由、高橋正太郎、前垣義弘)

平成27年 臨床病理 63巻 793頁～798頁

審査結果の要旨

本研究は二相性けいれんと遅発性拡散能低下を呈する急性脳症（AESD）と遷延性熱性けいれん（FS）を急性期脳波スペクトル解析により鑑別可能か検討したものである。24時間以内でのAESD症例群の脳波スペクトルは、alpha、betaおよびgamma帯域のパワー値がFS症例群と比較し有意に低値を、delta/alphaおよび $(\text{delta} + \text{theta}) / (\text{alpha} + \text{beta})$ の値が有意に高値を示した。また、24時間以内に経過を迫えた各群2症例の検討では、FS症例は時間経過とともにtheta、alphaおよびbetaのパワー値が高くなる傾向を認めたが、AESD症例には認めなかった。本論文の内容は、発症初期の脳波スペクトル解析によりAESDとFSを早期に鑑別できる可能性を示唆したものであり、小児医学における急性脳症の早期診断法の開発研究を推進するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。